変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.41

公営住宅の入り口に住民たちが植えた希望の花

岩手県大船渡市・市営住宅平団地（2014年◆平成26年引渡し完了）

里中高志
Satonaka Takashi
illustration：Shigeyuki Sakata

黄色いガザニアやピンクのニチニチソウが重なる葉の間から小さな花弁を覗かせる。キクの苗は開花の日に向けて背伸びの真っ最中だ。ここは岩手県大船渡市末崎町の市営住宅平団地（UR都市機構が災害公営住宅として1棟を施行。2014年に大船渡市に引渡し完了）。避難所から仮設住宅を経てこの公営団地に移り住んだ住民たちが、団地の入り口に広がる花壇に数百株の苗を植えたのは、入居から1年ほどが経った2015年の5月25日だった。

花壇作りで、住民のリーダー的な役割を果たしたのが、杉山さだ子さん。杉山さんは、入居した14年5月のことを、こう振り返る。

「津波ですっかり流されて、仮設に入ったときは何も持っていなかったんだけど、支援物資や頂き物で、段々荷物が多くなって。狭い一部屋だけの仮設ではいつも身体を縮めていて、具合も悪くなってきたんです。でもこの団地に入ったら荷物は全部収納できて、しかも手足を伸ばせるから、身体の調子もよくなったよ」

仮設住宅が建てられていたのは中学校の校庭だった。楽器の演奏を聴かせてくれたり、毎日の登校の際に声をかけてくれる中学生の優しさに胸を熱くしながらも、校庭を使えなくしていることの申し訳なさを杉山さんは感じていた。

そのような環境から一歩踏み出しての公営住宅入居。平団地の10世帯15人の全住民にとっても、それは新しい門出だった。

ただ、気がかりなのは住民たちが相互に声をかけあう新しいコミュニティが形成されるかどうか。杉山さんには、同じ仮設住宅で苦楽をともにした熊谷凉子さんという友人はいたが、ほかの住民たちはこれまで互いに多くの接点がなかった。また80代以上の高齢者も多く、コミュニティ作りには誰かの後押しが必要だった。

そこで、UR都市機構と大船渡市から、そのナビゲート役として白羽の矢が立てられたのが、岩手大学の船戸義和特任研究員。NPOの運営が専門分野の船戸氏は、被災地におけるコミュニティ作りのあり方を模索していた。船戸氏は、住民同士の顔合わせで、名前と部屋番号、被災前の居住地のほかに、好きなことや入居しての感想をそれぞれ紙に書いてもらい、会話のきっかけを作るなどの工夫をこらす。だが、それはあくまで絆作りの導入部だと船戸氏は話す。

「コミュニティ形成において支援者はあくまで背中を押すだけで、実際に動き出してからは住民の方たちが中心にならないと活性化しない。杉山さんと熊谷さんとの何気ない会話から、この方たちならこの平団地の中心人物になり得ると確信したんです」

杉山さんも熊谷さんも、一日中テレビを見るだけで部屋の外にも出ないお年寄りがいることに、このままではいけない、と心配していた。止まってしまった時計をふたたび動かすためには、住民が一丸となって取り組めるイベントが必要だ。そのとき、「入り口の花壇に花を植えたい」という思いに背中を押されたのだった。

自分たちの力で花を植える

UR都市機構・岩手震災復興支援本部の岡本佳久は、3・11の震災当時はまだ大学4年生だった。テレビに映る惨状にいてもたってもいられず、大学のある京都から東北に向かい、ボランティアで陸前高田の瓦礫のなかを駆け回った。その後大学院で建築を学んだ岡本が就職先にUR都市機構を選んだのは、復興に携わる仕事をしたかったからだ。

「建物はただ建てるだけではなく、いかに生活の場として人の輪を作るかが大事だとは、就職活動のときから考えていました。だから平団地を担当することになって、せっかくの集会室があまり使われていない現状に、これはなんとかしないと、と思ったんです。特にショックだったのは、『仮設住宅の方が仲のいい人がいて楽しかった』と言う方がいたことでした」

自慢の花の前で、左から船戸氏、熊谷さん、杉山さん。

思い悩んでいた岡本の耳に、杉山さんたちの「花を植えたい」という言葉が届いたとき、これだ、と思った。岡本は話し合いを呼びかけるカラフルなチラシをパソコンで作成。そして住民たちが集まると、あとは彼らの自主的な発言を待った。花を買うお金は、行政の補助金などを使うこともできたが、住民たちからは「これから植えるのは私たちの花壇。ひとり1000円くらいで賄えるのであれば、自分たちでお金を出し合って購入したい」という声が自然と重なった。話し合いの場に立ち会った船戸氏が話す。

「過剰な支援をすると、受け手が依存的になってしまうことがあります。支援者はいつかは第一線から姿を消さなくてはいけない存在です。だから、平団地の住民たちが自分たちの力で苗を調達して植えると決めたとき、その主体性に、『これならば大丈夫だ』と感じました」

苗を植える当日。平団地正面の花壇には、休憩を取る時間も惜しいとばかりに一心に作業をする住民たちの姿があった。URの若手職員である岡本も一緒に土を耕した。杉山さんのよきパートナーである熊谷さんが言う。

「花を植えるときは楽しかったし、いつも杉山さんと賑やかに話しているから、ここでの暮らしも寂しくないね」

その日植えられた苗の一本一本に、皆の思いが託されていた。

これからも続く復興のしるし

岡本の上司でもあるUR都市機構・岩手震災復興支援本部の生駒浩司主幹は話す。

「花壇については岡本もUR側のプロジェクトリーダーとして頑張ってくれましたが、なんといっても、杉山さんの積極的な声かけが住民たちの盛り上がりにつながったのでしょうね」

いま、色づきはじめた花をみながら杉山さんはこう呟く。

「花があることで、自然と『咲いてきたね』とか、お隣さんとの会話が広がります。自分たちで植えた花だから、時期が来たら部屋に飾ったりお墓に供えたり、大事に使いたいですね」

大船渡市の市営住宅計画に携わってきた大船渡市都市整備部の千葉洋一住宅公園課長は話す。

「建物こそ大分復興してきましたが、大船渡の方々にとっての震災体験は過ぎ去ったわけではなく、これからもずっと続いていくんだと思います。仮設から市営住宅に移ったのはゴールではなく始まりですから、地域との交流もまだまだこれからです。いかに安心した生活を送れるようになるかが、復興のひとつの到達点ということになるのでしょう」

来年も、その次の年も、杉山さんたちは苗を植え替えるつもりだ。自らの手で土をかぶせた花々の苗は、生活に新しい彩りを添える、希望のしるしでもあるのだから。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社